

黄 強*

Qiang HUANG *



「辞旧」「迎新」

—上海市民衆の年末年始行事の実態①—

Out with the old, in with the new: the current status of folk traditions in Shanghai around the Spring festival

旧暦の正月つまり春節は中国人にとって最も重要な祝祭日である。歳末の十二月下旬から正月月上旬までの間、中国人は「喫年夜飯（家族がそろって食べる年越しのご馳走）」や「放爆竹（爆竹を鳴らす）」「賀歳拜年（年始回り）」「焼頭香（寺廟に入り新年最初の線香をたむける）」「迎財神（財神を迎える）」「拝太歳（太歳神を礼拝する）」などの行事を行い、めでたい雰囲気包まれる。

大林太良『正月の来た道』が指摘したように、新年（春節）は中国人にとって「生命が更新され、それによって人間ばかりでなく作物や家畜の豊穰性も確保される機会であり、さらに世界の秩序が改新される機会」である¹⁾。このような重要な意義を持つ春節習俗と行事の根底には「辞旧迎新（旧歳を送り新年を迎える）」という基本的な考えが存在している。人々は「去る年をしっかりと送ると良い新年を迎えられる」と信じている。故に、中国人の春節習俗と行事には年末の「辞旧」と年始の「迎新」という2つの重要な柱があり、両者が緊密に結びついている。

周知のように「文化大革命」終了以降、中国政府の改革開放政策の推進および宗教政策の転換により、中国人の伝統的な習俗と宗教信仰は次第に「復活」の道を辿っている。「文化大革命」で禁止された様々な伝統的春節習俗と行事も次第に人々の生活に戻ってきた。上海通誌編纂委員会編『上海通誌』（第四十三巻「社会生活」）の記載によれば、上海市の場合、「放爆竹」や

「焼頭香」「迎財神」などの伝統的な春節習俗と行事は1960、70年代に禁止され、姿が消えたが、1980年代以降再び上海市民の春節に戻り、盛んに行われている²⁾。1980年代以降の上海市民の春節活動実態を深く理解するために、ここではまず『上海通誌』等の記述に基づいて以下の「表1. 上海市における春節習俗行事の変化状況一覧表」を作成する。

表1に見られるように、上海市の場合、旧暦年末の十二月下旬から年始の正月月上旬までの春節習俗・行事には主に16項目がある。表の1、「送竈（竈神を送る）」から15、「接財神（財神を迎える）」までの春節習俗・行事は1950年代以前に盛んに行われていた伝統的な習俗と行事である。16、「拝太歳（太歳神を礼拝する）」は1980年代以降民衆の「宗教的需要」等に応じて生まれたものである。

1950年代以降、中国社会、政治の激動につれて伝統的な春節習俗・行事は急激に変化している。とくに、1960～70年代の「文化大革命」では「送竈」や「献土地（土地神等を祀る）」「過時節（祖先・死者を祀る）」「放爆竹」「進頭香」「在家祭祖（家で祖先を祀る）」「接財神」などは「封建迷信」「四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）」として禁止され、人々の生活から姿を消した。「喫年夜飯」や「守歳（大晦日夜、徹夜で年越しをする）」「賀歳拜年」「逛街消遣（街を歩き回って遊ぶ）」等は残っているが、そ

* 中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

表1. 上海市における春節習俗行事の変化状況一覧表

		1950年代以前	1960、70年代	1980年代以降
1	送 竈	○	×	△
2	擲檐塵	○	○	○
3	献土地	○	×	○
4	過時節	○	×	○
5	喫年夜飯	○	○	○
6	守 歳	○	△	○
7	放爆竹	○	×	○
8	進頭香	○	×	○
9	在家祭祖	○	×	○
10	賀歳拜年	○	△	○
11	走親訪友・喫年酒	○	○	○
12	压岁錢	○	△	○
13	新媳婦回娘家	○	△	△
14	逛街消遣	○	○	○
15	接財神	○	×	○
16	拜太歳	×	×	○

※○印は行うこと、×印は行わないこと、△印は行うが、内容に大きな変容があることを表す。

の内容には時代の変化につれて大きな変容があった。

1980年代以降、「文化大革命」で姿を消した春節習俗・行事はほとんどが復活し、「禁止」「消失」「復活」という数奇な運命を辿り、今なお人々の生活に脈々と息づいている。言うまでもなく、1950年代以前と比べ、復活された春節習俗・行事の内容には様々な変容が見られる。

「辞旧」の年末行事と習俗

すでに指摘したように、中国人の春節習俗と行事には「辞旧迎新(旧歳を送り新年を迎える)」という基本的な考えがある。『上海通誌』等の記載によれば、上海地区では新しい年を迎えるために、旧暦年末の十二月二十三日から大晦日までに「送竈」や「擲檐塵(大掃除)」「喫年夜飯」など、様々な「辞旧(旧歳を送る)」行事が行われている。とくに、大晦日夜に行われる「喫年夜飯」「守歳(夜を徹し新年を迎える)」は正月一日(元旦)の「迎新」行事につながり、年

末の「辞旧」行事のクライマックスである。

年末の「辞旧」習俗と行事について、上海地区の民間には「廿三送竈、廿四擲檐塵、廿五牽磨、廿六蒸糕、廿七献土地、廿八過時節、廿九・三十等過年」という民謡が伝えられている³⁾。この民謡によれば、1950年代以前、上海地区の人々は「十二月二十三日に竈神を送り、二十四日に大掃除し、二十五日に餅の粉を碾き、二十六日に餅を蒸し作り、二十七日に土地神を祀り、二十八日に祖先祭祀の過時節を行い、二十九日と三十日に新年の到来を待ち」、どの家もみな多忙の中にあった。ここでは『上海通誌』や『上海宗教誌』など地方誌の資料に基づき、「辞旧迎新」の年末行事の実態および変化状況を詳しく分析する。

【送竈】

中村喬『中国の年中行事』が指摘したように、年末に行われる「送竈(竈神を送る)」行事は「1年を各家ですごした竈の神がこの日に天に昇る

と信じられたからである」。「竈の神は直接家族生活にかかわる家の神であったので、送竈は民間ではもっとも重要な年中行事の一つとなっていた」⁴⁾。

『上海県誌』等の地方誌の記載によれば、上海地区の「送竈」は主に旧暦十二月二十三日夜あるいは二十四日夜に行われた。例えば『嘉定県誌』(民国十九年刊行)には「十二月二十三日夜あるいは二十四日、飴を用いて竈神を祀り、紙の駕籠および篝火を燃やして竈神を送る」という記載がある⁵⁾。竈神はその日、天廷に戻り人間の善悪と過失を報告するので、人々は竈神に人間の是非を言わせないために、「送竈」行事で竈神の歯を粘らせる「廿四糖」と呼ばれる飴、および団子、慈姑、里芋などを用いて竈の神を祀る⁶⁾。その日には子供たちが市場で声を張り上げて紙の竈神像を売ることもあった。それを「古い竈神像が去り、新しい竈神像に改める」と言う⁷⁾。また、天に昇った竈神は大海日夜半あるいは正月十五日夜に再び各家々に戻るので、その時また「接竈(竈神を迎える)」行事が行われる⁸⁾。

1950年代以降の「送竈」行事の変化状況について、『上海通誌』や『奉贤県誌』『川沙県誌』等には主に次のような記載が見られる。

①1950年代以降、この行事は次第に上海市民の生活から消えていった。例えば『上海通誌』には「20世紀50年代から、送竈、献土地の習俗は次第になくなった」という記載がある⁹⁾。また、『奉贤県誌』には「(送竈と接竈)その習俗は1950年代以降、次第に廃止された」という記載がある¹⁰⁾。

②1980年代後期と1990年代初期、この行事は一部の農村家庭でなお残っている。例えば『川沙県誌』には「20世紀80年代後期と90年代初期、農村で一部の老人を主とする家庭には送竈の習俗がなお残っている」という記載がある¹¹⁾。

③1950年代以降、この行事における竈神を送るなどの儀式はなくなったが、その日に団子を作り食べる習俗はなお残っている。例えば『川沙県誌』には「送竈は送竈君とも呼ばれ、旧暦十二月二十三日あるいは二十四日に行われる。…団子を作る習俗は今なお残っている」という記載がある¹²⁾。また、『嘉定県誌』には「旧暦十二月二十三日は竈神を送る日である。…団子を食べる習俗は今なお残っている」という記載がある¹³⁾。

これらの記載により、年末の「送竈」行事は1950年代以降、次第に一般市民の生活から消えていったが、1980年代後期と1990年代初期に一部の農村家庭では再び行われ、とくに、その日に団子を作り食べる習俗は今なお多くの地域に残っていることがわかる。

【揮檐塵】

上海地区では年末の大掃除(煤払い)行事が「揮檐塵」あるいは「揮煙塵」「揮塵」と呼ばれている。「檐塵」は軒に積もった埃を指し、「揮」は払い、はたく意であるので、「揮檐塵」は軒などに積もった埃などを払い清める。すなわち大掃除をすることである。

『上海通誌』等の記載によれば、旧暦十二月下旬から、どの家も大掃除を行い、長い竹箒を用いて屋根や軒、壁に積もった塵埃、蜘蛛の巣などを払い落としたり、門や窓を拭いたり、布団や蚊帳をほどいて洗ったりする。また、人々は爪を切り散髪し、入浴をする¹⁴⁾。そのような大掃除の行事には「家や身体を清めて新年を迎える」「家や心身の清浄化によって生命と万物が更新される」などの意義が含まれている。

『上海通誌』『川沙県誌』等の記載によれば、このような「揮檐塵」行事は1960、70年代の「文化大革命」でも禁止せず、「優良伝統(優れた伝統)」として発揚され、今なお行われている¹⁵⁾。

【献土地】

上海地区の民間では旧暦十二月二十七日前後に土地神などの神々に供物を捧げて祀る祭事を「献土地」あるいは「做年」「完年礼」と呼ばれる。

この「献土地」祭事について、上海地区の地方誌には様々な記載がある。例えば『蒲溪小誌』には「二十五日から大晦日までの間には、村でも町でもみな紙の神像を母屋に安置し、動物の肉や酒などの供え物を用いて神々を祀ることがある。世の中ではその祭事を『做年』また『献土地』と呼ぶ」という記載がある¹⁶⁾。また『紫堤村誌』には「(送竈)の後、動物の肉や酒などを用意し諸神に報いることは『做年』あるいは『献土地』と呼ばれる」という記載がある¹⁷⁾。『川沙庁誌』には「(大晦日)前の数日、部屋の塵埃を掃除し、また諸神の紙像を安置し、肉や酒、果物、菓子を用いて一年の平安に報いる。これを做年と呼ぶ」という記載がある¹⁸⁾。

それらの記載によれば、1950年代以前上海地区の「献土地」祭事には主に以下のような特徴がある。

①「献土地」祭事は主に「送竈」行事を終える十二月二十五日から大晦日までの間に行われ、年末の「辞旧」行事の一つである。

②この祭事で祀る対象は土地神をはじめとする多くの神々である。鄭土有主編『上海民俗』の記載によれば、昔「神模店」という店では「献土地」祭事に祀られる「紙の神像」を販売していた。その「紙の神像」には24枚一揃い(24の神々)と、36枚一揃い(36の神々)のものがある。裕福な家は一般的に36枚一揃いの「紙の神像」を神模店から購入し、母屋に安置して祀る。貧しい家は主に24枚一揃いの「紙の神像」を祀る¹⁹⁾。この記載によって「献土地」祭事で祀られる神々の数は24～36に達したとわかる。

③この祭事で使用する供え物には主に動物の肉(牲)や酒(醴)、果物、菓子などがある。

鄭土有主編『上海民俗』の記載によれば、昔人々は神々の加護に感謝するために、「献土地」祭事で多くの供え物を神々に捧げた。裕福な家の供え物には「三牲(豚の頭、雄鶏、鯉)」「四鮮果(四つの果物、すなわちサトウキビ、蜜柑、クログワイ、赤い菱の実)」「四乾果(四つの干した果実、すなわちリュウガン、棗、砂糖漬けの果物、カンラン)」および蒸し糯米菓子、酒などがあった²⁰⁾。

④人々が「献土地」祭事を行う目的は、主に一年間に平安や利益、恩恵をもたらしてくれた神々に供え物を捧げて酬いることである。故に、「献土地」は年末に神々の加護に感謝する酬恩祭事であると言える。

1950年代以降の「献土地」祭事の変化状況について、『上海通誌』には「献土地」は前述の「送竈」と同じく、「次第に上海市民の生活から消えていった」という記載がある²¹⁾。また、1992年出版の『嘉定県誌』には「供神(神々に供え物を捧げる)と祭祖(祖先を祀る)は近年再び盛んになった」という記載もある²²⁾。

これらの記載によれば、「献土地」祭事は1950年代から1980年代までの間に次第に廃れていったが、1990年代以降、再び人々の生活に戻り、とくに嘉定県等の地域では盛んに行われているとわかる。

【過時節】

上海地区では年末における「祭祖(祖先・死者を祀る)」行事は主に「過時節」と呼ばれる²³⁾。その呼び方は上海地区の伝統的な祭祖慣習に深く関わっている。『金山県誌』等の記載によれば、上海地区の年中行事には「四時六節」と呼ばれる祖先・死者祭祀の祭日がある。「四時六節」は春、夏、秋、冬の四季(四時)における清明節、夏至、旧暦七月十五日の中元節、旧暦の十月朝(朔日)、冬至日、大晦日という6つの祭日(六節)を指す²⁴⁾。人々はその「四時六節」の祭日に様々

な「祭祖」活動を行い、「過時節」あるいは「過節」と称している。例えば『嘉定県統誌』には「清明節、中元節、十月朝、冬至日、大晦日には祖先の位牌を設けて祀ることがあり、それを過節と称する」という記載がある²⁵⁾。要するに、上海地区の民謡が言及した「二十八日に過時節」はおそらくその「四時六節」の中の年末大晦日の「祭祖」を指している。また、年末の「祭祖」に対して、上海地区では「過時節」「過節」という呼び名のほかに、「擺年夜香」や「年夜羹飯」などの呼び名もある。

また、上海地区における年末の「過時節」が行われる期日について、『上海県誌』等の地方誌には様々な記載が見られる。一部の地区では年末の「過時節」は旧暦十二月二十八日あるいは二十九日夜に行われ、民謡の「二十八日に過時節」と一致する。例えば『羅店鎮誌』には「(十二月二十五日の大掃除)以後の三、四日夜、祖先を祀り、それを『年夜羹飯』と称する」という記載がある²⁶⁾。

しかし、多くの地区ではその「過時節」は主に「除日(大晦日)」に行われる。『松江府誌』や『上海県誌』『青浦県誌』『重輯張堰誌』等には「除日には祖先を祀る」、「除日の前には神々を祀り、除日には祖先を祀る」、「民間では除夕を大年夜と呼ぶ。その日、家々は祖先を祀る」というような記載が多く残っている²⁷⁾。

「除日(大晦日)」における「過時節」の祭祖活動は主にその日の昼あるいは午後、すなわち家族全員がそろって「年夜飯(歳終の宴)」を食べる前に行われる。鄭土有主編『上海民俗』の記載によれば、その祭祖活動には主に次のような内容がある。

①まず食卓に祖先用の食器を並べ、たくさんの料理を祖先に供え、そして酒杯の中に酒を注ぎ、蠟燭と線香を点す。

②家族全員は長幼の順序に従って祖先を拝む。

③最後には祖先にご飯を捧げ、紙銭と「経疏(寺院からもらった死者の名簿)」を燃やす。

上述の祭祖活動が終わると、家族全員は「年夜飯」を食べ始める²⁸⁾。

1950年代以降の年末「過時節」行事の変化状況について、『奉賢県誌』や『南匯県統誌』『嘉定県誌』等の地方誌には主に次のような記載が見られる。

①1950年代から1980年代までの間、年末の「過時節」行事はすでに消滅した。例えば、1987年出版の『奉賢県誌』には「大晦日の昼、祖先を祀り、肉や魚、鶏などの料理を供える。祭祀が終わった後、供える料理を鍋に入れて温め直し、家族全員が一緒に食べる。現在、その風俗はすでに消滅した」という記載がある²⁹⁾。また『川沙県統誌』には「1949年以降、年末年始の祭祖活動は次第に薄らいできた」という記載がある³⁰⁾。

②1990年代以降、年末の「過時節」行事は清明節、中元節の「祭祖」などと同じく、再び盛んになる。2005年に出版した『南匯県統誌』の記載によれば、1990年代以降、民衆の間では祖先、死者に孝心と追憶の気持ちを伝える祭祀活動が盛んに行われている。民間には一種の「旧俗の甦り」現象が現れた。例えば、死者の葬儀や周年祭、清明節の祭祖などはいずれも古い習慣を踏襲するようになった。また「做七月半」「擺年夜香」すなわち旧暦七月十五日中元節、大晦日に祖先を祀る活動も同様である。とくに、農村部ではそれらの活動は盛んである³¹⁾。

上述の記載により、年末の「過時節」行事は前述の「献土地」と同じく、1950年代から1980年代までに次第に姿を消したが、1990年代から再び人々の生活の中に甦り、とくに農村部では盛んに行われているとわかる。

ここでは1つの重要なことを指摘しなければならない。すなわち、1980年代以降、多くの市民たちは仏教寺院に死者の位牌を供養してい

るため、その年末の祭祖活動も仏教寺院で行うことになった。現地調査で得た資料によれば、現在、上海市の仏教寺院はその「宗教的ニーズ」に応え、年末の十二月に「蓮池海会」や「年更法会」等の法事を行って祖先や死者を供養する。例えば、上海市南翔鎮における雲翔寺が旧暦十二月二十三日に催す「蓮池海会」法事は「老祖宗饗食年夜飯」（祖先に年越しの食事を振る舞う）とも呼ばれ、主に誦地藏経や仏供、蓮供等の儀礼を行う。その「老祖宗饗食年夜飯」という名称は年末祭祖の特徴をはっきり示している。

また、上海市金山区亭林鎮における松隠禪寺は毎年旧暦十二月二十四日から二十六日までの3日間に「年更法会」を行っている。その法会は「老祖宗及冤親債主孤魂亡靈等更飯法会」とも呼ばれ、すなわち歴代祖先および仇敵や味方、債主等の死者、浮かばれない孤魂、亡霊に「更飯（食事）」を供える法会である。その法会には祖先や死者の往生位牌が祀られる。2014年と2015年の価格は次のように設定されている。

往生小蓮位、功德金50人民币／1枚
 往生大蓮位、功德金100人民币／1枚
 法会功德主、功德金1,000人民币／1名

【喫年夜飯】

「喫年夜飯」とは大晦日夜、家族がそろって年越しのご馳走を食べる歳終の宴である。上海地区ではその行事を「合家歡」あるいは「喫年夜飯」と呼ぶ。例えば『法華郷誌』には「（除日）老幼が団欒して飲食することを『合家歡』と呼ぶ」という記載がある³²⁾。また、『川沙庁誌』には「（除夕）老幼が集まって飲食することを『喫年夜飯』と呼ぶ」という記載もある³³⁾。「合家歡」という名称には「一家そろって楽しく過ごす」という意味がある。従い、大晦日夜の食事で家族全員が揃っていることは人々にとって大事な

ことである。『上海県誌』や『南匯県誌』等の記載によれば、大晦日夜の「喫年夜飯」を食べるとき、家族は1人も欠くことができず、「1人が欠席したら、その年に3石6斗の食糧が無くなる」という俗信が広く伝わっている³⁴⁾。故に、故郷を離れている人々は大晦日の「喫年夜飯」の前にすべからく家に戻る。万が一参加できない者がいる場合、必ず食卓には欠席者の座席と食器を設け、その形によって一家の団欒を示す³⁵⁾。

上海地区の多くの家庭に於いては祭祖の「過時節」を終えて「年夜飯」を食べ始める。その点について、『上海通誌』には「祭祖は過時節と呼ばれる。祭祖が終わると、祖先に供えた料理を鍋に入れて温め直し、一家そろって年夜飯を食べる」という記載がある³⁶⁾。また、『金山県誌』には「大晦日の夜には盛りたくさんの料理を用意し、線香と蠟燭を点し、紙銭を燃やして祖先を祀り、その後一家団欒して年夜飯を食べる」という記載がある³⁷⁾。これらの記載によれば、「喫年夜飯」は祭祖の「過時節」につながる行事である。とくに、「過時節」の中で祖先に供えた料理を鍋で温め直し家族そろって食べる行動には、祖先と共に食べる、すなわち「共食」の意味がある。その根底には「共食」によって霊力を得ると同時に祖先との一体化を図り、家族の連帯を確認・強化する考えが潜んでいる。

年夜飯の料理はとても豊富である。それらの料理には様々な縁起のよい意味を託している。例えば、「筍乾焼肉（塩漬け干筍とバラ肉煮）」には長く伸びる竹のように「節節高（年々運が一節一節に高くなる）」の意がある。「炒塌棵菜（タアサイ炒め）」には「順利（物事が順調に運ぶ）」の意を託している。また、魚の料理は「年年有余」と呼ばれ、「年々余裕がある」という意を寓している。肉団子や魚団子、蛋餃（肉の餡を卵で作った皮で包む餃子）等のスープ料理は

「金銀元宝湯」と呼ばれ、「裕福になりたい」という願いを含んでいる³⁸⁾。

『上海通誌』や『川沙県誌』等の記載によれば、「喫年夜飯」は1960、70年代の「文化大革命」の中でも中断することなく、大事な行事として行われていた³⁹⁾。しかし、当時、食品は常に不足しており、政府配給のチケットがなければ、魚や豚肉、家禽、卵、春雨、黒木耳などの食材を購入することができなかった。「年夜飯」で肉を十分に食べることは当時の人々にとって過大な望みであった⁴⁰⁾。

1990年代以降、経済改革開放の進展につれて、上海市民の年夜飯の料理は次第に豊富でかつ高級になり、海鮮や山の珍味や、高級な野菜も多く使っている⁴¹⁾。また、年夜飯の準備と食後の片付けはとても骨が折れることであるので、近年「花銭買轻松（金を費やして楽を買う）」という考えを持ち、家族全員そろって料理店、レストランで「年夜飯」を食べる家庭は年毎に増えている⁴²⁾。『労働報』の記事（2015年10月18日）によれば、2015年10月は旧暦2015年大晦日（2016年2月7日）までまだ4ヶ月あるが、上海市における料理店、レストランの年夜飯の予約はすでに7割を超えている。多くの知名な料理店は「一座難求（一席も得難い）」の状態になった。また、『労働報』が実施したアンケート調査結果によると、料理店・レストランで年夜飯を食べると答えた者は回答者全体の半分以上を占め、そのうち、すでに年夜飯を予約した者が13.9%に達した⁴³⁾。

【守歳】

「守歳」は年夜飯の後、家族が眠ることなく夜通し年越しをする伝統的な行事である。上海地区では全国各地と同じく、昔から「守歳」の行事が広く伝わっている。例えば、清同治十年に刊行した『上海県誌』には「（喫年夜飯の後）徹夜する者がいる。それを守歳と言う」という

記載がある⁴⁴⁾。また、清光緒五年に刊行した『川沙庁誌』には「老幼が集まって飲食することを喫年夜飯と言う。夜通し眠らずに年越しすることを守歳と呼ぶ」という記載がある⁴⁵⁾。それらの記載によって、清代の上海地区では「守歳」はすでに重要な年末行事として行われていたことがわかる。

『上海通誌』等の地方誌の記載によれば、上海地区の人々は「年夜飯」を終えてから夜明けまでの「守歳」で様々な活動を行っている。それらの活動は主に以下のようなものである。

①「種宿火（火種を残す）」

「喫年夜飯」の後、人々は足炉あるいは竈に薪や炭を燃やす。その火種は消えず、正月一日までに燃やし続ける。家族全員で足炉を囲んで徹夜する。その活動は「種宿火」と呼ばれる⁴⁶⁾。上海方言で「火」の発音は「富」の発音と同じであるので、その「種宿火」には「富（火）」が今年から来年に続いている」という願いが含まれている⁴⁷⁾。

②「貼門神・春聯（門神や春聯を貼る）」

上海地区には「喫年夜飯」の後、赤い紙で春聯、福の字を書いて門に貼る習俗がある。例えば、清光緒五年に刊行した『華亭県誌』には「老幼が炉を囲んで守歳を行う。夜半、疫病神を払い、門神と桃符を更新し、春聯を書く」という記載がある⁴⁸⁾。また『金山県誌』には「家族が団欒して年夜飯を食べる。赤い紙で春聯を書く」という記載がある。『宝山県誌』には「家族全員が団欒して年夜飯を食べる。その後、春聯、福の字を貼る」という記載がある⁴⁹⁾。

周知のように、新しい春聯や年画、門神を門、壁に貼ることは年末における重要な習俗の1つである。『青浦県誌』の記載によれば、上海市青浦県の人々が大晦日夜の「守歳」で門に貼っている春聯には主に「五穀豊登（五穀豊穰）」や「六畜興旺（家畜の繁殖と成長）」など、平安や幸福を祈る意味がある⁵⁰⁾。人々はそれ

らの春聯によって新年の祈願や希望を表している。

年画には春聯と同じく、人々の祈願や希望が託されている。『上海通誌』の記載によれば、「天官賜福（天官が福を授ける）」や「文武財神（文財神と武財神）」「招財進宝（財運をもたらす）」「榴開百子（石榴のように子供が多い）」「五子日昇（五人の子が昇進する）」などの伝統的な年画は人々に大いに人気がある。言うまでもなく、年画には時代の変化につれて新しいものが次々に現れる。上海が貿易港として開港以降、西洋文化の影響を受けて、上海市民の年画には西洋サーカスを題材とした年画も登場した。1950年代には時代の風貌を反映する年画が流行っていた。1980年代以降、一部の市民には壁掛けのカレンダーを年画として使うことがある⁵¹⁾。

近年、上海市の仏教寺院と道教施設は市民の「春聯を貼る」習俗に従って年末に春聯、福の字を市民に贈る活動が行っている。例えば、仏教の玉仏禅寺は2015年1月31日～2月1日（旧暦十二月十二日～十三日）に春聯や福の字を揮毫し市民たちに贈る「送福到万家（福を万家に送る）」活動が行われた。その活動では十数人の僧侶が市民のために千枚以上の春聯や福の字を書いた⁵²⁾。2015年は羊の年であるので、「馬去雄風在、羊来福氣生」や「三羊開泰日、万事亨通年」など羊年祝福の春聯は市民たちに大いに人気がある。また、道教の上海城隍廟と白云觀、上海道教書画院が2015年2月7日（旧暦十二月十九日）に行った「送福万家（福を万家に送る）」活動では多くの道士と書道家は春聯や福の字を揮毫し、市民たちに贈った⁵³⁾。

③「接竈（竈神を迎える）」

前述の「送竈」にすでに指摘したように、上海地区における竈神を迎える「接竈」行事は主に大晦日の夜半あるいは正月十五日（元宵節）夜に行われる。地方誌等の記載によれば、大晦

日夜半に「接竈」を行う家庭は主に上海市北部と西北部の嘉定県や宝山県、崇明県などに集中する。例えば、明万曆三十三年に刊行した『嘉定県誌』には「(除夕) 竈の火を消し、新歳の竈神を迎える」という記載がある⁵⁴⁾。清光緒八年に刊行した『宝山県誌』には「(除夕) 竈の火を消し、新歳の竈神を迎える。それを接竈と言う」という記載がある⁵⁵⁾。また、民国十九年に刊行した『崇明県誌』には「(除夕) 夜半、竈を祀って竈神を迎えることは接竈と呼ばれる」という記載がある⁵⁶⁾。

『羅店鎮誌』の記載によれば、大晦日夜半の「接竈」では人々が竈神の紙像を部屋に設け、線香や蠟燭、茶、果物等を庭に供え、恭しく礼拝しながら竈神を迎える⁵⁷⁾。また、南匯県における「接竈」には竈神を迎えるために爆竹を鳴らすこともあった。

④「忙家務（家事を忙しくする）」

上海地区では「正月一日には掃除や水汲み、ゴミ捨て等をしてはいけない」という禁忌があるため、主婦たちは年明けの前に食器、鍋、野菜を洗い、米をとぎ、水を汲み、ゴミを取り除き、様々な家事を忙しくしている。この事について、『奉賢県誌』には「除夕の夜、食器や鍋を洗い、野菜を洗って切り、米をとぎ、水を汲み、部屋を掃除する。正月一日にはそれらの家事をしてはいけないため、大晦日夜にはそれらの家事をやり終える必要である」という記載がある⁵⁸⁾。また、『上海県誌』の記載によれば、上述の家事のほか正月一日の朝に食べる糯米団子や正月料理も用意しなければならない⁵⁹⁾。

⑤「玩樂（遊ぶ）」

伝統的な「守歳」の中では人々が主に炉を囲んで酒を飲みながら楽しく談笑し、また「擊鑼鼓（銅鑼、太鼓を敲く）」や「観鬧年（芸人の鬧年芸を観る）」など、様々な遊びも行っていた⁶⁰⁾。『上海通誌』の記載によれば、それらの遊びには賭博をすることもある。賭博好きな者が集ま

って徹夜で賭博をすることは伝統的な「守歳」の中でよく見られる光景であった⁶¹⁾。『金山県誌』等の記載によれば、1949年以前、上海市民が年末年始の春節期間に行われた賭博には麻雀や牌九（カルタの一種）、トランプ、骰子、押宝、搖攤（博奕の一種）などがある。1949年以降、それらの賭博は政府の「賭博禁止」によってほぼ根絶した。1980年代以降、麻雀やトランプ等に熱中する者は次第に増えているので、麻雀やトランプ等は再び年末の「守歳」に加わり、重要な遊びとして行われている⁶²⁾。

1950年代以降、とくに1960～70年代の「文化大革命」では家族が炉を囲んで酒を飲みながら楽しく談笑する活動にも様々な変化があった。『松江県誌』の記載によれば、1950年代以降、多くの農家は「喫年夜饭」の後、家族会議を開いた。一家の主人はその会議で年度経済収支、損益決算を公表し、来年度の計画、仕事を手配し、また家族の人々に小遣いを配る⁶³⁾。つまり、「守歳」での「談笑」は年末の家族会議になった。

また、1980年代以降テレビの普及につれて、家族がそろってテレビ番組を観ることは大晦日夜の重要な遊びになった⁶⁴⁾。大晦日夜に放送するテレビ番組には主に民衆に親しまれている音楽や歌舞、演芸などがあり、めでたい雰囲気が出ている。とくに、中央テレビ局が毎年大晦日夜に放送する「春節聯歡晚会」という芸能バラエティー特別番組には多くの有名な歌手や芸能人が集まって上演するので、人々に大いに人気がある。CCTVの報道によれば、2015年2月18日（旧暦十二月三十日）の「春節聯歡晚会」番組を観る人数は約6.9億人に達した⁶⁵⁾。つまり近年、多くの上海市民は全国各地と同じく、「春節聯歡晚会」等のテレビ番組を観ながら、旧年を送り新年を迎えている。

上海市の仏教寺院と道教施設は人々の「守歳」習俗に従って大晦日夜に様々な「新春晚会」「新春祈福法会」を行っている。例えば、仏教の玉

仏禅寺は2006年から毎年大晦日夜に「迎新春慈善晚会」や「祈福撞鐘法会」を行っている。2015年2月18日（旧暦十二月三十日）の「迎新春慈善晚会」等には主に以下の内容がある。

1. 「2015年迎新春、温暖除夕夜慈善晚会」及び「祈福撞鐘法会」（大晦日夜21時30分～24時）

2. 「礼仏、祈願、加持、洒浄」活動（大晦日夜21時～翌日朝4時）、参加功德金：800人民元／1名

3. 「辞旧迎新撞鐘」活動（大晦日夜23時30分～24時）（写真1参照）

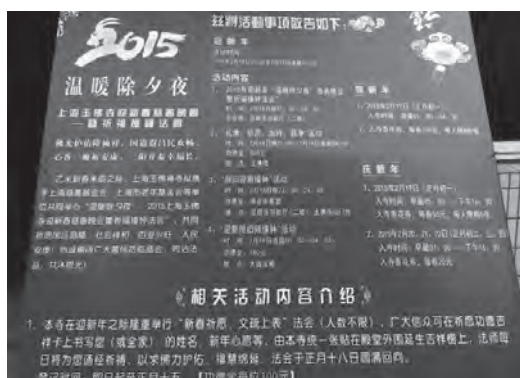


写真1. 玉仏禅寺の「2015年春節活動の掲示」

玉仏禅寺の掲示によれば、2015年の「迎新春慈善晚会」は「温暖除夕夜（暖かい大晦日夜）」をテーマとし、歌舞や音楽等の上演および祈福撞鐘法会などによって「国運昌隆、社会祥和、百業興旺、人民安康（国運の昌盛、社会の順調安定、商売の繁盛、人民の安康）」を祈願する。

上述のように、上海市の人々は、大晦日夜に様々な「守歳」活動によって年の新旧交替の重要な時刻を過ごし、新しい年の曙光を迎えている。

最後に1つの重要な事を指摘しなければならない。すなわち、「送竈」から「守歳」までの年末「辞旧」行事の根底には「報賽」という伝統的な考えが流れていることである。小学館『国語大辞典』の解釈によれば、「報賽」とは「祈

願が成就したお礼として、神仏に参拝すること」である⁶⁶⁾。すなわち、神々や祖先を祀ってご加護に感謝することである。

『礼記・郊特性』の「祭有祈焉、有報焉」に見られるように、中国の伝統的農耕社会における祭りには「祈るもの」、「報いるもの」があり、すなわち「春夏祈而秋冬報（春夏に祈り、秋冬に報いを行う）」のように、春夏に十分な雨の恵みを祈り、秋冬に収穫のお礼として神々に報いる⁶⁷⁾。とくに、歳末の十二月には古代の人々が先嗇（農業の始祖）や司嗇（古来の農業指導者）、百種（百穀の神）、禽獸（鳥と獣の霊）、猫・虎などの神々に報いるために「蜡」の祭りを行っていた。「蜡とは索（求め集める意）であり、即ち毎年十二月に、万物の霊を呼び集めて饗応するのである」。つまり、「蜡」の祭りは「古之君子、使之必報之（古代の君子が仕事に使った者に必ず報いる）」という「報賽」の精神に基づいて行われたものである⁶⁸⁾。

上海地区における年末の「送竈」「献土地」「過時節」等の習俗と行事は「蜡」の大きな影響を受けている⁶⁹⁾。酒や三牲、食事など、多くの供物を以て竈神や土地神、祖先・死者等をもてなす事には1年間のご加護に感謝する「報賽」の意が表されている。要するに、「辞旧迎新（旧歳を送り新年を迎える）」の年末習俗と行事は神々や祖先、万物の霊を敬い尊びながら旧歳を送っている。

紙幅に限りがあるので、上海市民衆の年始活動について稿を改めて考察したい。

〔付記〕 本稿は中部大学教職員の特別研究期間制度による研究成果の一部である。

〔注〕

- 1) 大林太良『正月の来た道』、小学館1992年、p.14。
- 2) 上海通誌編纂委員会編『上海通誌』（第四十三卷社会生活）、上海人民出版社2005年（上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。

- 3) 松江県地方史誌編纂委員会編『松江県誌』（第二十九卷風俗）、上海人民出版社1991年（上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 4) 中村喬『中国の年中行事』、平凡社1988年、p.253。
- 5) 『嘉定県統誌』（民国十九年刊行）には「十二月二十三、或二十四日、以飴糖祀竈、焚紙幡及油篝火送之」という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文献出版社1995年、p.59）。
- 6) 『青浦県誌』（清光緒五年刊行）には「二十四夜祀竈、曰送竈、用粉团、糖果。謂電神朝天言人過失、用飴膠牙（俗為元宝形、名廿四糖）」という記載がある。また、『羅店鎮誌』（清光緒十五年刊行）には「二十三日、二十四日、夜做粉团、買飴糖（俗謂廿四糖）、慈姑、芋艿等物、祀電畢、即將竈馬焚送。相伝云電神上天、奏人間一歲功過」という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文献出版社1995年、p.47とp.78）。
- 7) 『外岡誌』（1961年刊行）には「二十四日、以飴祀竈、云是日神訴人過於天章、以飴膠其口使勿言。小兒持紙画電神像叫売於市、言其去旧更新也」という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文献出版社1995年、p.63）。
- 8) 『月浦里誌』（民国二十三年刊行）には「除夕接竈、並於檐際挿冬青、柏枝（十二月三十夜接竈）」という記載がある。また、『上海県誌』（清同治十年刊行）には「（元夕）以珍珠圓為節食、祀電神、曰接竈」という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文献出版社1995年、p.82とp.7）。
- 9) 『上海通誌』には「20世紀50年代起、送竈、献土地習俗漸廢」という記載がある（同前注2）。
- 10) 上海市奉賢県誌修編委員会編『奉賢県誌』（卷三十風俗誌）には「臘月廿三夜、竈上供着飴糖、柿餅、糕点、清茶和糯米小圓子、点燃香燭祭竈、祭畢焚毀竈君紙馬、俗称送竈君。用飴糖作供品、伝説可粘住電神嘴巴、在向玉帝彙報時可隱惡揚善、能免災禍。正月半竈上貼『上天奏好事、下界保平安』对聯、再請竈君入竈、謂之接竈君。此俗在50年代後逐漸廢除」という記載がある（上海人民出版社1987年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 11) 上海市浦東新区史誌編纂委員会編『川沙県統誌』（第三十四卷風俗・方言）には「在農村、有竈必有竈君。農曆十二月二十三或二十四日、為送竈君上天之日。20世紀80年代後期和90年代初期、在農村一些以老年人為主的家庭還有送竈之俗」という記載がある（上海社会科学院出版社2004年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 12) 上海市川沙県誌修編委員会編『川沙県誌』（第三十二卷風俗）には「送竈、也称送竈君、在農曆

- 十二月廿三或廿四日。民諺有『竈君老爺上天、有一句話一句』之說。為此、獻電祭品中必備团子和餡糖、以粘住竈君嘴巴、免得他多說婦姑勃谿的細事。…今仍存做团子的習俗』という記載がある（上海人民出版社1990年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 13) 上海市嘉定県誌編纂委員会編『嘉定県誌』（卷三十三風俗宗教）には「農曆十二月廿三、為送竈君日。…今仍存喫团子的習俗』という記載がある（上海人民出版社1992年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 14) 『上海通誌』には「擗檐塵沿襲至今、家々用長竹捆掃帚或稻草擗掉屋頂四角及牆上灰塵、蜘蛛、擦門窓、拆洗被褥、蚊帳、擦洗器皿。人々剪指甲、理髮、洗澡』という記載がある（同前注2）。
- 15) 『川沙県誌』には「建国後、帶有迷信色彩的活動逐年減少、喫年夜飯的習俗尚存、大掃除等優良傳統得到發揚』という記載がある（同前注12）。
- 16) 『蒲溪小誌』（1961年刊行）には「自二十五至除夕、無論鄉鎮皆供紙馬於堂、具牲禮祀之、俗曰做年、亦曰獻土地、大約即古人蜡祭之意也』という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.15～16）。
- 17) 『紫堤村誌』（1961年刊行）には「（送竈君）自後、備牲酒等儀遍賽諸神、名曰做年、亦曰獻土地』という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.13）。
- 18) 『川沙庁誌』（清光緒五年刊行）には「（除夕）先幾日掃屋塵、供諸神紙馬、具牲禮、設果餅、以酬卒歲之平安、曰做年』という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.22）。
- 19) 鄭土有主編『上海民俗』、甘肅人民出版社2003年、p.238～239。
- 20) 同前注19（p.238～239）。
- 21) 『上海通誌』には「20世紀50年代起、送竈、獻土地習俗漸廢』という記載がある（同前注2）。
- 22) 『嘉定県誌』には「農曆十二月三十日（逢小月為廿九日）夜為除夕、俗稱年三十夜、是民間辞旧迎新、最為熱鬧的節日。家々戶々忙於擗檐塵、換春聯、易門神、貼年画、供神祭祖。…貼春聯、喫年夜飯沿襲至今。供神祭祖、近年又盛』という記載がある（同前注13）。
- 23) 『上海通誌』には「祭祖、稱過時節。祭畢、祭菜回鍋、合家喫年夜飯』という記載がある（同前注2）。
- 24) 上海市金山県誌編纂委員会編『金山県誌』（第三十七編民情民俗）には「旧時祭祖、稱過時節、每年6次、稱四時六節。四時指春、夏、秋、冬。六節指清明、夏至、七月半、十月朝、冬至、年夜』という記載がある（上海人民出版社1990年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 25) 『嘉定県誌』（民国十九年刊行）には「清明、中元、十月朝、冬至、歲除則設位而祭、名曰過節』という記載がある（同前注5、p.57）。
- 26) 『羅店鎮誌』（清光緒十五年刊行）には「二十五日、為諸佛下降之辰、家々以赤小豆和米煮飯、拂屋梁塵。後三四日夜祭先、謂之年夜羹飯』という記載がある（同前注6、p.78）。
- 27) 『松江府誌』（清嘉慶二十二年刊行）には「除日祀先』という記載がある。『青浦県誌』（清光緒五年刊行）には「除日前祀神、除日祀先』という記載がある。『重輯張堰誌』（民国九年刊行）には「除夕、俗呼『大年夜』、家々祀先』という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.5とp.47、p.43）。
- 28) 同前注19（p.239）。
- 29) 『奉賢県誌』には「除夕中午、祭祀祖先、供肉、魚、雞等菜肴。祭畢、祭菜回鍋、全家共食、此俗今已革除』という記載がある（同前注10）。
- 30) 『川沙県誌』には「解放後、春節祭祖活動日趨淡化』という記載がある（同前注11）。
- 31) 南匯県誌編纂委員会編『南匯県誌』（第三十九編風俗宗教）には「90年代以来、人民群眾中以向祖宗或死者表示孝心和悼念之情為初衷的祭祀活動比較盛行、出現了『返祖現象』。主要表現在辨葬事過程中、基本上承襲了南匯地区原有的一套習俗、特別是東部地区尤為講究。其次是『做周年』。…再次是『做清明』。…此外還有『做七月半』、『擗年夜香』等、即在陰曆七月十五、過年之前祭祀祖宗。這在農村比較盛行』という記載がある（上海社会科学院出版社2005年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 32) 『法華郷誌』（民国十一年刊行）には「（除夕）老幼团聚飲膳、曰『合家歡』』という記載がある（『中国地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.11）。
- 33) 『川沙庁誌』（清光緒五年刊行）には「（除夕）老幼团坐飲膳、曰『喫年夜飯』』という記載がある（同前注18、p.22）。
- 34) 上海県誌編纂委員会編『上海県誌』（第三十篇社会）には「合家团聚喫晚飯、稱喫年夜飯。不可缺一、缺則是年失落3石6斗飯糧』という記載がある（上海人民出版社1993年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 35) 上海市南匯県誌編纂委員会編『南匯県誌』（第三十三編民衆民風）には「除夕晚上、合家团聚、辞別旧歲、迎接新年、喫年夜飯、若是有親人在外不能回家喫年夜飯、要為他留出座位、並放置碗筷、以示团聚』という記載がある（上海人民出版社1992年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 36) 『上海通誌』には「祭祖、稱過時節。祭畢、祭菜回鍋、

- 合家喫年夜饭」という記載がある（同前注2）。
- 37) 『金山県誌』には「除夕之夜、置備最豐盛菜肴、焚香点燭燒紙錢、拜祭祖先、然後合家团聚喫年夜饭」という記載がある（同前注24）。
- 38) 『上海通誌』には「年夜饭菜肴豐盛、數量充足。…飯桌上必備全魚、稱年年有餘。筍干燒肉、意節節高。炒塌棵菜、寓塌滑（順利）。炒黃豆芽或發芽豆、名玉如意。粉絲為長壽、菠菜為甜蜜。另有蛋餃、肉丸子、魚丸子熬成的金銀元宝湯等」という記載がある（同前注2）。
- 39) 『川沙縣誌』には「建國後、帶有迷信色彩的活動逐年減少、喫年夜饭的習俗尚存、大掃除等優良傳統得到發揚」という記載がある（同前注12）。
- 40) 『上海通誌』には「60、70年代、魚肉禽蛋、粉絲木耳等都憑票限量購買、年夜饭以能喫夠肉為滿足」という記載がある（同前注2）。
- 41) 『上海通誌』には「90年代起、多用海鮮珍禽、精細蔬菜。各單位節前職工公費聚餐、有的請家屬、請上級領導出席、也稱喫年夜饭。市區、縣城居民流行到飯店喫年夜饭、兄弟姐妹每年輪流做東」という記載がある（同前注2）。
- 42) 『川沙縣誌』には「20世紀80年代以前、一般都在家喫年夜饭、80年代起、有些富裕的居民家庭、花錢買鬆松、合家到飯店喫年夜饭」という記載がある（同前注11）。
- 43) 邵未來「滬年夜饭預訂已超7成、部分飯店將不設第二輪」、『勞動報』2015年10月18日。
- 44) 『上海縣誌』（清同治十年刊行）には「有達旦不寐者、曰守歲」という記載がある（同前注8、p.9）。
- 45) 『川沙序誌』（清光緒五年刊行）には「老幼固坐飲膳、曰喫年夜饭。竟夕不寐、曰守歲」という記載がある（同前注18、p.22）。
- 46) 『上海縣誌』には「種宿火、忌熄。…竟夕圍爐不寐守歲」という記載がある（同前注34）。
- 47) 『奉賢縣誌』には「点燃一只脚炉或電肚內燃樹塊、火種不熄、燃至年初一。火、富同音、意為『今年富到明年』。老少圍爐、達旦不寐、名曰『守歲』」という記載がある（同前注10）。また、『重輯張堰誌』（民國九年刊行）には「種火於爐、不使焰息、待元旦燃用、以為煙火不絕。有通宵不寐者、曰守歲」という記載がある（同前注27、p.43）。
- 48) 『華亭縣誌』（清光緒五年刊行）には「老幼圍爐守歲。夜分、禳瘟神、易門神、桃符、寫春帖」という記載がある（『中國地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.18）。
- 49) 『金山縣誌』には「（除夕）傍晚、合家團圓喫年夜饭。晚上、用紅紙寫春聯、並煨腳爐留火種、取『隔年富（火）』好口彩」という記載がある（同前注24）。また、上海市寶山区地方誌編纂委員會編『寶山縣誌』には「到年底除夕夜、習稱『年卅夜』或『大年夜』、全家團聚喫年夜饭、然後貼春聯、福字、放爆竹、守歲至深夜」という記載がある（上海人民出版社1992年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 50) 上海市青浦縣誌編纂委員會編『青浦縣誌』（第三十六篇風俗）には「除夕夜燃八月半点剩的紅燭、老少守歲、還張貼『五穀豐登』、『六畜興旺』等春聯、至今有些旧風俗仍有流行」という記載がある（上海人民出版社1990年、上海市地方誌辦公室「上海通」、www.shtong.gov.cn）。
- 51) 『上海通誌』には「家々貼春聯貼年画、有天官賜福、文武財神、招財進寶、榴開百子、五子日昇等、上海開埠後有西洋馬戲表演年画、解放後流行反映時代風貌的年画、80年代起流行掛掛曆」という記載がある（同前注2）。
- 52) 智遠居士「送福到万家・共圓中國夢、上海玉仏禪寺法師為市民免費題寫春聯」、菩薩在線、2015年1月31日（www.shfjw.org）。
- 53) 「上海道教舉行福字春聯義贈活動」、上海城隍廟、2015年2月7日（www.shchm.org）。
- 54) 『嘉定縣誌』（明萬曆三十三年刊行）には「（除夕）竈中滅火、乃迎新歲之竈神。家人圍爐而坐、謂之守歲」という記載がある（『中國地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.54）。
- 55) 『寶山縣誌』（清光緒八年刊行）には「竈中滅火、乃迎新歲之竈神、名曰接竈。家人圍爐而坐、終夜不就寢、名曰守歲」という記載がある。また、『寶山縣誌』（民國十年刊行）には「（正月）十五夜為元宵、鄉間多於是夜接竈（惟城市、月浦等鄉概於除夕接竈）」という記載がある（『中國地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.68とp.71）。それらの記載によって寶山縣における「接竈」の期日には大晦日夜半と正月十五日夜という2つの形態が存在した。
- 56) 『崇明縣誌』（民國十九年刊行）には「（除夕）中夜祀竈迎神、曰接竈」という記載がある（『中國地方誌民俗資料匯編・華東卷（上）』、書目文獻出版社1995年、p.87）。
- 57) 『羅店鎮誌』（清光緒十五年刊行）には「（除夕）夜半、供竈馬於殿、香燭、茶果羅列殿前、肅衣冠拜之、謂之接竈」という記載がある（同前注6、p.78）。
- 58) 『奉賢縣誌』には「除夕之夜、洗滌刮鍋、洗菜切菜、淘米提水、揮塵掃地、因這些事年初一忌幹、除夕都要幹好」という記載がある（同前注10）。また、『上海通誌』には「（守歲）主婦忙於洗滌刮鍋、洗理菜蔬、淘米提水、揮塵掃地、清除垃圾」という記載がある（同前注2）。
- 59) 『上海縣誌』には「做小粉圓子、備初一晨用。竟夕圍爐不寐守歲。…是日燒好春節期間所有菜肴」という記載がある（同前注34）。
- 60) 「守歲」の遊びについて、上海地区の地方誌には様々

な記載がある。例えば、『法華郷誌』（民国十一年刊行）には「有達旦不寐者、曰守歲。富者擊鑼鼓（諺云：年三十夜敲鑼鼓、不曉得窮多苦不苦）」という記載がある（同前注32、p.11）。また、『崇明県誌』（民国十九年刊行）には「家人围炉燃燭、達旦不寐、曰守歲、樂人鼓吹入富家、曰鬧年」という記載がある（同前注56、p.87）。

- 61) 『上海通誌』には「守歲、好賭者徹夜開賭」という記載がある（同前注2）。
- 62) 『金山県誌』には「解放前、賭風盛行、春節期間大賭、平時小賭、參賭者、男女老少皆有。場合有家庭、茶館和賭場。賭具有麻将、牌九、撲克、骰子、押宝、搖攤等。国民党政府明禁暗縱。解放後、人民政府大力禁賭、50～60年代基本禁絕、1968年春賭風復盛、70年代基本煞住、80年代死灰復燃」という記載がある（同前注24）。
- 63) 『松江県誌』には「解放後、不少農家在夜飯後、当家人召集家庭會議、公布本年經濟收支、盈虧情況、安排來年經濟計劃、給各家庭人員零用錢」という記載がある（同前注3）。
- 64) 『上海通誌』には「20世紀80年代後、合家看電視、聊家常、或打牌、搓麻将、燃放爆竹」という記載がある（同前注2）。また、『上海県誌』には「飯畢全家看電視節目守歲、或徹夜搓麻将」という記載がある（同前注34）。
- 65) 「2015羊年央視春晚電視觀眾達6.9億」、CCTV 央視新聞、2015年2月19日（m.news.cntv.cn）。
- 66) 『国語大辞典』の「報賽」項目、小学館、p.2173。
- 67) 『礼記・郊特牲』には「祭有祈焉、有報焉」という記載がある。鄭玄の注には「祈、猶求也。謂祈福祥、求永貞也、謂若穫禾報社」という解釈がある。また、『資治通鑑・唐高祖武德九年』の胡三省の注には「春夏祈而秋冬報」という記載がある（『漢語大詞典』の「祈報」項目、漢語大詞典出版社、p.4423）。
- 68) 『礼記・郊特牲』には「伊耆氏始為蜡。蜡也者、索也。歲十二月、合聚万物而索饗之也。蜡之祭也、主先嗇而祭司嗇也、祭百種、以報嗇也。饗農及郵表啜禽獸、仁之至義之盡也。古之君子、使之必報之」という記載がある（竹内照夫著『礼記』、明治書院1977年、p.400）。
- 69) この点について、『崇明県誌』（民国十九年刊行）には「夫民終歲勤勤、春秋伏臘、以社以方、以享以祀、報賽之余、与家人婦子為酒食相勞、雖事或不經、不能無惑於祀老、抑皆康樂之徵焉。孔子謂百日之蜡、一日之澤、蓋於是見張弛之道矣」という記載がある（同前注56、p.87）。